

『いろは文庫』の英訳①—翻訳の実際にもみる英訳の意図

2012年11月10日日本英学史学会本部例会報告レジュメ

川瀬 健一

1 : はじめに : 問題の所在

1880 (明治20) 年の秋¹、ニューヨークの G. P. Putnam's Sons 社から、一冊の日本の物語の英訳版が出版された。

『*The Loyal Ronins : An Historical Romance*』という本で、表表紙と裏表紙とは極彩色のカラー印刷で物語の登場人物の浮世絵が印刷され、裏表紙には本の標題を「忠義浪人」とわざわざ漢字で印刷し、出版社名を同じく漢字とカタカナで「紐育 ジ・ピ・パットナム子之社中板行」と印刷し、中には江戸の浮世絵作家・溪斎英泉(1791-1848)の浮世絵 (原画はカラーのものをトレースした白黒のもの) 37枚が掲載された、とても凝った体裁の本である。

元の本は、江戸後期の戯作者・為永春水 (1790-1843) が書いた『正史実伝 いろは文庫』で、これは江戸時代初期の赤穂事件 (江戸城中での刃傷事件に伴う赤穂藩浅野家の取り潰しと、その浪人らが藩主の遺恨をはらすために旗本で高家筆頭の吉良上野介の江戸本所一つ目の屋敷に討ち入り、上野介を討ち取った事件) を題材にとったいわゆる「忠臣蔵」の外伝 (事件そのものを追わず、赤穂浪人や盟約を脱退して脱落した浪人らの個人的事情などを中心とした人情話を中心としたもの) ともいべき小説であった。そして『いろは文庫』は、1836 (天保7) 年から順次分けて出版され、春水が死去した 1843 (天保14) 年には5編・15巻 (30回) と書き続けられた。その後為永春水の名を継いだ二世春水 (1818-1886) が書き続け、1872 (明治5) 年には18編・54巻 (108回) となったが、完結しないまま終わった人気本であった。

英訳者は、二年前にボストン大学法学校を優秀な成績で卒業し、当時はボストンで弁護士の助手をしていた留学生・齋藤修一郎 (1855-1910) (当時25歳) と、マンチェスター在住で、日本の美術品の仲介業者で日本を題材とした小説をいくつか発表していたイギリス人の作家・エドワード・グリー Edward Greay (1836-1888) (当時44才)²であった。

この本はとても好評であったようで、いくつかの新聞にもその紹介が出され、1880年11月3日には、ニューヨークタイムズ紙に、翻訳文の一部を紹介した詳細な書評まで掲載された。そしてその後1882年にはフランスのパリでそのフランス語訳が出版され、さらには1884年には英訳版の第二版が今度はニューヨークとロンドンとで出版されている。しかし、この本は日本人の手による「忠臣蔵」の英訳本としては最初のもので、明治の日本ではそれなりに知られていたようだが、その後はあまり注目されず、文学史でもほとんど取り上げられていないようである。

これを初めて詳しく紹介し、この本が出版されたことでどのような影響があったのかを研究したのが、評論家で作家の木村毅で、『日米文学交流史の研究』(1960年講談社刊) の第13章「忠臣蔵とシオドア・ルーズベルト」である。

¹ これは1880年9月13日のニューヨーク・ヘラルド紙に、この本の紹介がわずか数行だが掲載されていることと、本の二人の訳者の序文の日時が1880年7月19日となっていることから判断した。この書評および他の書評はボストン大学総合図書館司書さんの調べによる。

² 彼の経歴については、資料1の「エドワードグリーの自殺」を参照。グリーの年齢は、1888年当時の国勢調査によると44歳である。たまたまマンチェスターの国勢調査が行われた1880年6月15日当時、齋藤修一郎がグリー家に逗留しており、齋藤のファイルにグリー家の家族構成とそれぞれの年齢や氏名が残されていた。以上は、ボストン大学総合図書館司書さんの調べによる。

二番目にこの英訳本を取り上げたのは、歴史家の宮澤誠一で、これは『近代日本と「忠臣蔵」幻想』（2001年青木書店刊）の第1章啓蒙思想の洗礼の中の一つの節として取り上げられている。

三番目が、外交史家の松村正義で、これは『日露戦争100年—新しい発見を求めて』（2003年成文社刊）の第3章歴史的な遺産と逸話の探求の3としてとりあげられている。

四番目が、民族主義的教員の占部賢志で、これは『続歴史の「いのち」—公に生きた日本人の面影』（2006年財団法人モラルジー研究所刊）の第四部世界史の中の日露戦争の「知られざる祖国への貢献」である。

この中でもっとも詳しく研究したのが木村の著書で、2の宮澤の著書は、木村が引用した齋藤の序文と、齋藤が明治43年に書いた論文「いろは文庫の英訳」とを参照して齋藤の英訳の意図を論じたものだが、残念ながら宮澤は、英訳本そのものは研究していない。3の松村の著書は、ほとんど木村の本の引き写しで、4の占部の著書は、木村と松村の著書の引き写しである。

したがって齋藤が訳した英訳版『いろは文庫』の研究においては、木村の著書が最も詳しくかつ網羅的である。だが木村の論考は、英訳者齋藤修一郎についてあまり深く研究しておらず、そして英訳本と元の『いろは文庫』とを詳しく比較して英訳の実際を研究していないなどの理由で、きわめて雑駁で多くの誤りを含んでいる。

それは次の4点においてである。

- 1：『いろは文庫』を英訳した意図・目的は何か
- 2：「忠臣蔵」をなぜ日本を代表する文学だとしたのか
- 3：「忠臣蔵」の話英訳の際になぜ『いろは文庫』だったのか（『赤穂義臣伝』や『仮名手本忠臣蔵』を英訳しなかったのはなぜか）
- 4：『*The Loyal Ronins*』の影響（セオドア・ルーズベルトがこの本に感銘を受け、是ゆえに彼が日露講和の労をとったと小村寿太郎外務大臣に話したというのは話の真偽）

この4点について順次木村の誤りを正す報告をしていきたいと考えているが、今回はその第一回として、『いろは文庫』英訳の意図・目的について、齋藤修一郎の序文と英訳の実際情況の考察を資料とし、さらにすでに報告した、齋藤の英文自伝と英文の歴史叙述論での齋藤自身の考え方を考察の背景として使用して、考察したい。

2：齋藤の序文の意味すること（資料2を参照）

齋藤はこの序で、赤穂事件での浪人の行動を「愛国心の萌芽」だとして、『いろは文庫』を選んだ理由を明確に述べている。しかし木村は、先の本の中では、英訳の意図を仄めかした齋藤の序を資料として提示しておきながら、この問題には全く目もくれず、論じてはいない。

木村が齋藤の英訳本を研究した時期が、愛国心が強調されることを国民的に嫌った時期であったからであろうか。冷戦の勃発の中で国軍を持つ当たり前の自立した国家に回帰しようと鳩山・岸の自由民主党が画策し、憲法の改悪と愛国心教育の復活を企画したが、戦前への回帰をおそれた国民的反対運動によって、この動きが阻止された時期であった。

この齋藤の序文に、後年の齋藤の「いろは文庫の英訳」を加えて、齋藤が英訳本を出した意図を論じたのが、宮澤である。宮澤は検討の最後に次のように結論した。

赤穂浪人の討ち入りに「賛嘆の念」を禁じえない齋藤は、たんに「忠臣蔵」の物語を紹介するにとどまらず、赤穂事件に「愛国心の芽生え」を認め、「武士道」を強調してナショナリズムの発揚につながるように、『いろは文庫』を改変して英訳しているのである。（前掲書p39）

この宮澤の指摘が正しいのかどうか、以下にみる英訳の実際からの検証してみよう。

3：英訳の実際からわかること①

『いろは文庫』の英訳の実際については、グリーンが彼の序で明確に述べている。

大略を提示すると、それは、『いろは文庫』は「忠臣蔵」の話をよく知っている人のために書かれているので、そのまま英訳したのでは、物語の筋書きがわからず読者が混乱する。そこで「忠臣蔵」の話の筋にあたる主な話で『いろは文庫』が省略したところは、『赤穂四十七士伝』や『誠忠義士銘々伝』などの本で補ったと。

では実際に『いろは文庫』のどの話が採用され、どのように配置されたのか（資料3を参照）

また、英訳本に採用された話と不採用の話の性格の違いは何か（資料4を参照）

以上の考察で見ると、英訳者は、『いろは文庫』の中から、討ち入りに参加した浪人の話の中で、彼等が、親子や夫婦の情愛を犠牲にしても、主君にたいする忠義の道を全うしたという話や、彼らの家族の方から、彼等が心置きなく主君の仇を討つことに専念できるよう自ら身を引いた話を主に選んで、英訳本を完成していることがわかる。そこには武士とその家族の哀感が漂う（資料5を参照）。

つまり齋藤がその序で、「（この本が描く）ロマンスの記述に、封建制度下の日本人の生活の、そして、700年以上の間、その国民に対しても強力な影響力を發揮したその制度の、素晴らしい説明を含んでいる」と述べた、その話を中心に英訳本は組まれたことがわかる。

そしてそうではない話。討ち入りに参加した浪人の過去の武勇談や赤穂浅野家の過去の話など、直接赤穂事件に関係のない話や、討ち入りから脱落した浪人の話などは除外された。英訳者が、『いろは文庫』を英訳するに際して、彼の意図を強調するために話を選んでいることがよくわかる。

だが、以上に検討したように齋藤は、『いろは文庫』の話の中から親子や夫婦の情を捨てなければならない悲しさを描いた話を主に選んでいた。だから齋藤の立場は「忠義」を賛嘆してはいない。「武士道」を強調してはいない。むしろそれを冷静に見つめ、忠義に生きなければならない武士とその家族の哀感に焦点をあてている。これは『いろは文庫』の著者・一世為永春水の立場でもある。

4：英訳の実際からわかること②

さらに英訳本を精査してみると、「いろは文庫」からとったのではない章が幾つもあることに気がつく。その一つが、物語の最後に記された「国外追放者の帰還」の章である（資料6を参照）。

この章は齋藤が、ずっと後になって、これは自分の創作だと述べている章である³。

この章の特徴は、将軍の交代によって追放を許されて帰還した、浪人らの遺児や妻や友人らにたいして、泉岳寺の住職が、「彼等の名誉は永遠に語り継がれるであろう」と述べ「彼等の価値が天皇によって認められる日がくるであろう」と予言をしたところにある。そして齋藤はここに注をつけて、「この予言は実現した。1869（明治2）年に天皇睦仁は泉岳寺に勅使を遣わして大石らを忠臣として顕彰した」と述べた。これは正確には、1868（明治元）年11月5日のことで、この時の勅語は「汝良雄等、固く主従の義を執り、仇を復して法に死す。百世の天下、人をして感奮興起せしむ。朕深く嘉賞す」というもので金幣を授けた（宮澤誠一著『近代日本と「忠臣蔵」幻想』2001年青木書店による）出来事である。英訳本最終章の泉岳寺住職の言葉は、この勅語を下敷きにして創作されたに違いない。

そして英訳本全体の中で見ると、この第40章のみが異彩を放っており、この章を付け加えたことで、英訳本の性格が全く異質なものに変化している。英訳本は忠義に生きる武士とその家族の

³ 1910（明治43）年1月1日の「日本及日本人」第524号に彼が寄稿した「いろは文庫の英訳」において、齋藤はこう言及している。

悲しさを描いた『いろは文庫』を主体にして、この話が省いた赤穂事件の重要な出来事を付け加えて完成された。したがって英訳本も先にみたように忠義とか仇討ちを賞賛していないし、これぞ武士道という言い方もしていない。だが最終章である 40 章だけは、赤穂浪人の行動を「長く歴史に残る素晴らしい行動」とし、しかもこれを明治になって天皇が称賛した事実によって補強することで、忠義の行動を称賛する性格を持っている。元々忠義に生きた武士とその家族の哀感を描いた本に忠義賛嘆のこの話を付け加えたことで、英訳本は、忠義の行動をより人間的に現実的なものとして浮かび上がらせた。『*The Loyal Ronins*』は、元の『いろは文庫』の人情本としての人間の生き様のリアルな描写を備えた、忠義の士の行動を称賛した新たな作品に生まれ変わったのである。

この登場人物の人間としてのリアルさが、『仮名手本忠臣蔵』や『赤穂義臣伝』とも異なる、近代小説としての性格を『*The Loyal Ronins*』に与えた。ここが既に英訳された諸本（ミッドフォードの『*Tails of Old Japan*』の「*The Forty-seven Ronins*」と、F.V.デッケンズの『*CYUSINGURA*』とも異なる性格であり、これゆえに人間のありさまをリアルに描く近代小説がすでに流行していた西欧世界に、この本が多いに流行した理由があったと思う。

まとめと課題：英訳の背景と意図

では、齋藤がわざわざ、欧米人に対して、日本人の忠義の行動を賞賛した小説を英訳して提示した意図はなんであったのか。

これは齋藤がこれまで、東京とボストンとで英学を通じてどのような世界観・日本観を持ってきたのかということと極めて関係の深いことだと思う。

齋藤は 1873（明治 6）年の冬に書いた英文歴史叙述論の中で、「中国人は忠義ということ言葉を面でしか理解していない」と述べていた。つまり彼は、日本は中国とは異なり忠君愛国の国だと考えていたわけだ⁴。そして 1874（明治 7）年の春に書いた英文自伝では、封建制度は「主人のために剣をもって奉仕すること」と明確に述べ、さらに、幼き日には攘夷主義者であった自分が、欧米の学問を学んだことで目を開かされ、欧米に侵略されないためには、日本は国体と国家統一が必要と述べ、天皇を中心とした統一国家として造りかえねばいけないと述べていた。ただしこれは、国粹主義者らの「神権天皇」による絶対主義国家ではなく、齋藤は日本国民を国の主体と考えていたし、欧米に学ぶことの必要を述べていたことから、天皇の統治の下で、議会制民主主義による政治決定とその下での内閣制度による統治であったことは明白だ⁵。齋藤はすでにこのときから日本を遅れた国として相対化するとともに、西欧を学ぶことの多い敵として批判的にとらえていた。

この流れで見ると、齋藤が「忠臣蔵」の英訳によって、日本は忠義の観念で統一された強い国だと示そうとしたのではないかとも読める。

だが、齋藤が「忠臣蔵」の英訳本を欧米人に提示しようとしたのが、アメリカに留学して 5 年間ボストンで法学士となるに必要な学問を修め、さらに留年してしまった一年間には憲法学と議会法を特別に学び、さらに弁護士として実務に励みながら、5 年間日刊新聞と週刊雑誌を精読して、アメリカ合衆国と言う国のありかたをつぶさに見聞き学んだあとであったことも考慮しなければならない。

齋藤は後年の自伝である『懐旧談』で、ボストンにいる間は、日刊新聞と週刊評論誌の「*NATION*」を読んでいて、新聞や雑誌が輿論形成に大きな役割を果たしていると知り、日本で新聞社や雑誌社を起そうと考えて帰国したと述べていた。ボストンでの齋藤も東京でと同じように、欧米に対して

⁴ 2012 年 7 月の例会にて「齋藤修一郎の比較文明論—歴史叙述方法の違いから見た日・中・欧」として報告した。

⁵ 2011 年 4 月の例会にて「齋藤修一郎の英文自伝—西洋との出会いとその衝撃」として報告した。これは 2012 年 3 月刊の「東日本英学史研究第 11 号」に掲載されている。

は批判的精神をもって対していた。実は齋藤はボストンで、アメリカを批判する言動を行っていた。当時懸案となっていた中国人問題で彼はアメリカ人の対応を批判していたのである⁶。

おそらくこうした活動を通じて、アメリカの国民輿論が、雑誌や新聞の論調を媒介にした討論によって形成される実情をつぶさに見て実感したに違いない。だから後の『懐旧談』が語るように、日本に帰国後、雑誌社か新聞社を作ろうとした。

つまり、齋藤は、東京にいた時と、5年間アメリカで学んで帰国した後とでは、形成しようとする日本国家像が変化していた可能性が高い。東京にいた当時には、国民を主体とした国家と考えてはいてもそれをどう形成したらよいかは「教育によって」という程度にしか考えていなかった。むしろこの頃の齋藤は、「忠義」の観念で国民統合を図ろうと考えていたことは先に見たとおりである。しかし5年間アメリカで、国民を主体とした政治の実情を見聞きし、その世論形成に自身も積極的に関わったことで、政治的主体としての国民は、「忠義」の観念では作れないということを実感したのではないのか。

こう見てくると、宮澤がその論考で、「齋藤は『いろは文庫』を「武士道」を強調してナショナリズムの発揚につながるように改変した」と断じたのは、勇み足だったように思う。おそらく宮澤は、齋藤が英訳本の序文で、「この国の学問の府の一つで受けた教育は、先祖の精神の援助と指導を加えれば、大いに役立つに違いない」と述べていたが、この「先祖の精神」とは、忠義の観念のことだと考え、英訳本の最後に「義士」が明治天皇によって顕彰された話を付け加えたことで、齋藤は「忠義」を日本国家の道徳的機軸と考えていたと判断したのだろう。

しかし齋藤は英訳本の序文で、「封建制度は過去 700 年にわたってその国民に強力な影響力を発揮した」と、過去形で表現した。ここにいう「封建制度」は、続く文で「不法行為」とか「それに愛国心の萌芽」と言っていることから、「忠義」の観念により家臣が主君のために命を賭ける行為をさしているものと思われる。

つまり齋藤は、「忠義」の観念で日本人が組織されるのはすでに過去の話だと考えているのだろう。とすれば序文の「先祖の精神」とは、「忠義」ではなく、むしろ「欧米に侵略されず、それに伍して立つ」と決意してきた幕末以来の「攘夷」を掲げた先人たちの精神だとした方が、欧米をも相対化して眺めてきた齋藤には相応しいように思える。だが彼は、「欧米には負けない」というこの精神も声高には叫ばない。

だから齋藤が英訳した「忠臣蔵」は、華々しくその忠義の行動を賞賛するのではなく、その行動の裏に、浪士とその家族が、夫婦や親子の情愛を捨てるという悲しい選択をしたことに焦点を当てて物語を叙述し、最終章だけでこの行為が歴史的に賞賛されるとだけ書いたのだ。形としては忠義の行動を賞賛しているようであるが、むしろ物語の焦点は忠義の裏に捨てられた情愛をこそ浮き彫りにしている。またこうしたことで逆に「忠義」の行動をよりリアルに描く結果になったのだが。

なぜ、齋藤が「忠臣蔵」を欧米人に提示するとき、声高に忠義の行動を賞賛する形をとらなかった

⁶齋藤は在米中の 1879 年 4 月に、ボストンで開催されたボストン市民による「中国人問題」（中国人移民労働者排斥問題）の討論会に主な発言者として参加し、中国人排斥はおかしいことと、これは文明と文明との衝突ではなく、両国民の習慣の違いと資本と労働の対立が背景にあるだけだと述べている（デイリー・ガゼット紙 1879 年 5 月 1 日：これもボストン大学総合図書館の司書さんの調査による）。同じ頃にハーバード大学にいた金子堅太郎は当時この問題について学生大会で議論して 1878 年の頃か、彼は香港や横浜にいる米国人は食い詰め者で素行も悪いが、中国や日本は国力が弱いかから彼等を国外追放にはできないと演説して、聴衆の注目を浴びて学生輿論を中国人追放反対に導いたという（明治 4 年渡米途米後懐旧録）。明治初年にアメリカに学んでいた明治第一世代の人々は、齋藤だけではなく、アメリカをも憧れの対象ではなく、日本を侵略しかねない敵国であるが、日本より強大でより高い文明を持った国として、客観的に相対化して批判的にみているというところだろう。

たのか。ここが大いなる謎である。

『いろは文庫』英訳版の序と翻訳の実際を検討しただけでは、彼がこの本を英訳した意図はしかとは判然とさせることが出来ない。

これはおそらく、齋藤がなぜ、欧米人に紹介する日本の代表的な文学として「忠臣蔵」を選んだのかというテーマを考察することで、もう少し解明できると思う。

齋藤は序文で、何を英訳しようかと迷った末に『いろは文庫』を英訳しようと決意し、英訳に取り組んだのは、1879年の夏であったと述べている。日本の小説を英訳しようと決意したのが1877年だから、なんと2年も迷っていた。その迷いを吹き飛ばしたのは何であったか。

ここに「忠臣蔵」英訳の意図も隠されているように思われる。

これを解明するヒントは、彼の生い立ちにあると思う。

そして彼が「忠臣蔵」の英訳を決めた1879年とは、彼の人生に多大な影響を与えた人生最大の事件である1870（明治3）年夏の武生騒動の原因であった、旧主君越前府中本多氏の家格回復問題が遂に解決し、念願の華族に列せられたそのときである。この家格回復問題—武生騒動—旧主君が華族に列するという一連の事件は、その構造も性格も「忠臣蔵」そのものであった。

ここに「忠臣蔵」英訳の直接的動機があったと思うが、長くなるのでこれは次回としたい。